

は、槐覚言語の流れるその律動感を殺ぐていちにしてい。

[illegible]

活版印刷は日本語に何をもちたか
(亀井孝)

前田年昭 t-mae@kobe-du.ac.jp

印刷の近代／活版印刷・写真植字・DTP
後期印刷史〈第2回〉 20120927

後期〈印刷史〉第2回 20120927

○
(
力

[illegible]

部第一章第一節三八九(シ)

[illegible][illegible]

た道具によつて人間の力が強くなつたところであり、外化された技術が享受できるときに可能になる。

[illegible][illegible][illegible]

費者のいまだヒスリーという面は否定できない。

[illegible][illegible]

の「乱れ」は、ソフトウェアの性能の低下に起因するものにより、人間の「わくわく」する能力の低下に起因するものと区別されるべきである。

とまったく異なるのは、そこに、日本語のその内面からの要求にこたえるものとしては何もないことである。言いうべくんば、舶来の印刷機械が、土着文化をまさに「機械的に」支配したのである。

漢字の書体と仮名

明朝体の漢字・仮名の組み合わせは、上海美華書館の明朝体活字の複製から始まった近代活版印刷導入に産物である。江戸の版本では楷書や明朝体は漢文や漢文訓読体の書物に用いられ、訓読文の補助記号的な役割を担っていたのは片仮名であった。連綿で書かれる仮名は和文系の書物に用いられ、組み合わされる漢字も行草体であった。明朝体の漢字と仮名は使用される文体もジャンルも異なり、同一本文に同居することはなかったのだ。江戸の版本における文体、ジャンルと印刷書体との関係を背景にすえるならば、そもそも本木・新町が和洋仮名と組み合わせようと意図していた漢字活字は、明朝体ではなく行書体のほうではなかったかと考えられるだろう。……

……明朝体と非和様系仮名の組み合わせは江戸の版本には存在しなかったので、文体やジャンルといった位相とその規範から遊離していた。そして、それがあらゆるジャンル、文体での使用を可能にし、近代活版印刷術による本文組版の標準書体の位置を占めるにいたった。……

ここで想起されるのは嵯峨本のなかんずく『伊勢物語』の活字書体である。他の漢字仮名交じり文の古活字版では連続活字を多用しているにもかかわらず、筆写された仮名の美しさや自然な伸びやかさは再現されず、かえってその版面には活字規格が必然にもたらす均質な空間が現れ

ている。嵯峨本『伊勢物語』が画一化、均質化を免れて仮名による文字表現の特質である伸縮自在さ、自由闊達さを再現し得ているのはなぜか。それは三倍格寸法の極端に長い「し」「に(耳)」や極端に小さい「か(可)」の制作、文字の肥瘦の強調など他の古活字版には見られない独自の工夫によつて、版面に文字と文字どうしの「間」が織り成す抑揚の表現を現出せしめているからにほかならない。かつて濱田啓介氏は嵯峨本が「手数を敢えてかけ」て制作されたことに「止むに止まれぬ反記号の精神」を看取つたが、それは均質化に抗うかのような振る舞いを見せる明治初期の活版印刷物の版面についてもあてはまることである。

和様仮名を主体に本文を組んだり、複数の仮名書体を意識的に混用して仮名文や手書きの気韻のごときものを代替的に表象しようとする試みは、明治三十年代に入るとしだい行われなくなつてゆく。しかし、そこで表現されたものを、日本の活版印刷術が標準であるがゆえに何ものをも表象しない本文組版の版面を獲得するにいたるまでの単なる過渡期の産物として済ませることはできない。表現されたそれは、単位化、抽象化に向かう活版印刷術を支える論理や感性とはまったく異質のものだ。けれども、写本や板本では自然であるがゆえに気付かれにくかった日本語書記様式の根源的とも思えるイメージがデフォルメされて顕在化されてきたのは、本来それにふさわしい乗り物ではない活版印刷術と接触し、これによつて再現されたからである。やがて近代活版印刷術はそのような異質の要素をも強引に掄象するなどして、その技術独自の表現様式を確立するにいたる。日本語の文体、表記、ジャンルと印刷書体との関係のあり方はそこで根本的に再編成されるであろう。

写植からDTPへの変化のなかで仕事の質はどう変わったか（前田年昭）

オフセット印刷の登場は、四〇〇年以上ものあいだつづいてきた活版印刷という物理的複製を、映像的な複製へと変えた。活字の手ざわりと重さは消失し、インキにおいては現像液のにおいになった。労働の肉体的な負担は軽減され、視覚が触覚より大きな比重をもつようになつた。変化は、組版と印刷がコンピュータ処理と結びつくことによつて劇的に加速された。手書きラフデザイン、カッターとピンセットによる版下のフィニッシュ作業、暗室でのカメラワークなどが次々と消えた。カンやコツという個々人の身体にしみこんだ技能は、コンピュータ・プログラムに移し替えられ、普通のオフィス環境のなかで印刷物の「はんこ」をこしらえることができるようになった。

組版とは、ひと連なりの文字を並べ、行に折りたたみ、ページにおさめる労働である。その核は文脈として生きている行の連続を制御し、改行をはじめ切断位置を発見し確定する作業である。コンピュータ処理との出会い以前は、ノウハウは身体を動かすことをつうじて（わかる）ようになり、熟練者の経験として伝えられてきた。そこには「封建的」な人間関係もあったかもしれないが、職人は腕にしみこんだ技能の熟練の力で尊敬もされた。

「何が作られるかということではなく、いかにして・いかなる手段をもって・作られるかということが、経済的諸時代を区別する。労働手段は、人間の労働力の発展の測度器であるばかりでなく、そのうちで労働が行なわれる社会的諸関係の指示器でもある」(カール・マルクス『資本論』第一第五章第一節、一八八ページ)

機械化、コンピュータ・プログラミングは、手仕事におけるカンやコツとして身体に蓄積された経験を身体からひきはがし、系統的に一定の連なりをもった技術として言葉にして取り出すことよってなされた。その草創期、労働の流れを言語化する苦悶は杉山隆男『メディアの興亡』（文藝春秋、一九八六年）では「WHY」の集中砲火」として描かれている。なぜそうするのか、ワークフローを人間のカンからひきはがし、コンピュータの言葉に移し替えていく過程を『メディアの興亡』から引いてみる。

「日本の新聞はページ完全主義です。スペースが足りなくなったからといって、記事の続きを他のページにまわすようなことは決してやりません。必ず同じページの中に収めるようにします」と言うところ、エンジニアたちからはいつせいに質問や反論がわきおこった。「なぜ次のページに続けちゃいけないのですか、続けると何か困ったことでもあるのですか」「……これには高妻もまいてしまった。「WHY」と正面から切りこまれても、相手を納得させられるだけの理由があるわけでもない。答えようにも答えようがないのである。[・:]「IBMの技術者は」日本の新聞づくりに原則よりその場の判断を優先させていると思えてならなかった。何かにつけ「なりゆき」というあいまいな理由で片づけてしまうケースが多いのである。しかし、コンピュータはロジックの生き物だ。そのコンピュータの力を借りようとするからには、それぞれがバラバラのように見えるものであっても、その中に何か法則性のようなものを見出して、互いをつなぐ筋道をひくことが必要なのだった」

組版プログラムは素人にも一定の水準の仕事が可能にした。本づくりの素人への解放のはじまりであることは確かだった。反面、(へわかる)ことが手仕事と一体であっただけに、手仕事の消失

2

3

4

5

9

8

2

9